

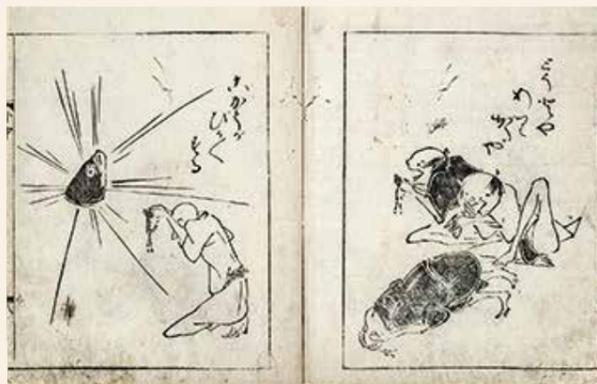
太平の世が長く続いた江戸時代には、人々の笑いを誘う愉快な「戯画」がたくさん描かれました。滑稽な人物を軽妙な筆致で描いた「鳥羽絵」は、その原泉のひとつと言えるもので、18世紀の大坂で鳥羽絵本として出版され、多くの人々を楽しませました。鳥羽絵を洗練させたとされる大坂の「耳鳥齋」はもちろん、鳥羽絵本の影響を受けたと考えられる江戸の「北齋」や「国芳」、そしてその流れをくむ「晁齋」など、時代や地域により変化しながらも、鳥羽絵に見られる笑いの感覚は脈々と受け継がれています。

本展では、ベルギーからの里帰り作品を含めた約280件の江戸の戯画により、「鳥羽絵」からの流れを追いつつ、人気絵師たちによる戯画のエッセンスをご紹介します。笑いを文化として培ってきた大阪の地で、多彩な笑いの世界をぜひお楽しみください。

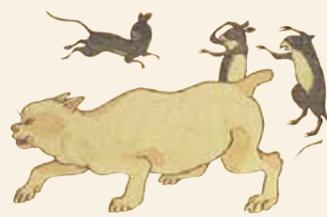
第一章 鳥羽絵

…大坂を中心に人気となった笑いの絵画

鳥羽絵は、広く戯画や漫画を指す言葉として使われることもあり、より限られた意味では、18世紀の大坂を中心に流行した軽妙な筆致の戯画のことを言います。そこに描かれる人物は、目が小さく、鼻が低く、口が大きく、極端に手足が細長いという特徴を持ち、その名は国宝「鳥獣人物戯画」の筆者と伝えられてきた鳥羽僧正覚猷に由来するものとされます。



『軽筆鳥羽車』 千葉市美術館



大根をくわえませられる役者や串に刺まれて焼かれる川魚屋など、現世での職業に合わせて考えられた様々な地獄。得意の緩い筆致がその魅力を際立たせる、機知に富んだ耳鳥齋の代表作です。



耳鳥齋(生没年不詳)は、18世紀後半の大坂を中心に活躍した絵師で、略筆で描いた独特な画風が人気を博しました。その人気は近代まで続いたと言われます。肉筆画のほか様々な版本も手掛けています。

第二章 耳鳥齋

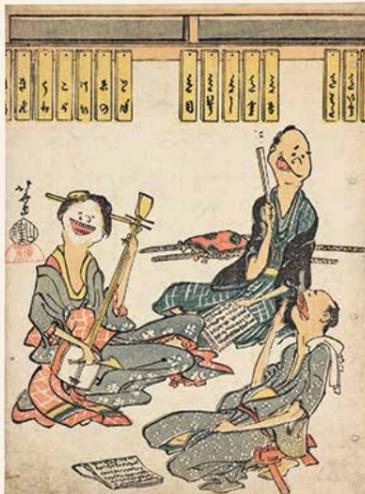
…独特のユーモアで一世を風靡した大坂の絵師

耳鳥齋「地獄図巻」(部分) 大阪歴史博物館

第三章 北齋

…驚異の才能で世界に名を馳せる画狂人

富士を描いた浮世絵で世界的に有名な葛飾北齋(1760-1849)も、戯画を手掛けています。主なシリーズに「鳥羽絵集(会)」や「風流おどけ百句」などがあり、その小さな画面には北齋の巧みな筆づかいにより躍動感あふれる人々が描かれています。



葛飾北齋「鳥羽絵集会 お稽古」ベルギー王立美術歴史博物館



葛飾北齋『北齋漫画』九編 浦上満氏蔵

北齋の描いた絵手本として知られる『北齋漫画』にも戯画的な要素が多く含まれています。よくに『北齋漫画』十一編はほぼ戯画のみで構成されており、北齋の戯画を知るうえで注目すべきものです。

「金魚づくし」シリーズ、幻の10図目は!?

「金魚づくし」シリーズは、現在9図が確認されています。9図目の「きんぎょづくし ぼんぼん」は、2011年に「没後150年 歌川国芳展」(大阪市立美術館ほか)で初公開され、この発見により10図目制作の可能性が高まりました。では、その幻の10図目とは一体どんなものだったのでしょうか。そのヒントになるのが上方で出版された「金魚 けんじゆつ」です。この図を描いた絵師は不明ですが、上方では江戸の浮世絵を縮小して写したものが多く制作されていることから、「金魚 けんじゆつ」も国芳が描いた幻の10図目を写した可能性が考えられるのです。幻の10図目は、まだどこかに眠っているかもしれません!



「金魚 けんじゆつ」 個人蔵



世界初! 歌川国芳の「金魚づくし」シリーズ全9図を一挙公開!!

(前期のみ: 4月17日(火)~5月13日(日))

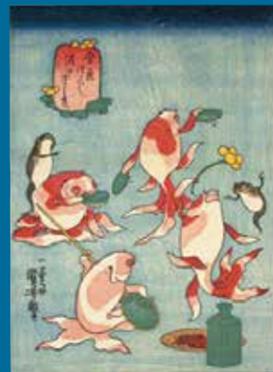
第四章 国芳

…江戸の戯画の大手といえるこの人

江戸における戯画の大手といえる歌川国芳(1797-1861)をおいて他にいないでしょう。国芳の手にかかれば猫や金魚たちもまるで人間のように画中を生き生きと動き回り、独楽や化粧道具までもが擬人化されて楽しい世界を繰り広げます。



歌川国芳「金魚づくし 百ものがたり」ベルギー王立美術歴史博物館



歌川国芳「金魚づくし 酒のざしき」ベルギー王立美術歴史博物館



歌川国芳「金魚づくし さらいとんび」ベルギー王立美術歴史博物館



歌川国芳「金魚づくし 玉や玉や」ベルギー王立美術歴史博物館



歌川国芳「きんぎょよ尽 まとい」ベルギー王立美術歴史博物館



歌川国芳「金魚づくし すさのおのみこと」ベルギー王立美術歴史博物館



歌川国芳「金魚づくし にはかあめんぼう」ベルギー王立美術歴史博物館



歌川国芳「金魚づくし いかだのり」個人蔵



歌川国芳「きんぎょづくし ぼんぼん」個人蔵